

二重目的語構文に現れる不変化詞の認可

松元, 浩一
九州大学大学院文学研究科 : 博士課程

<https://doi.org/10.15017/6788269>

出版情報 : 九大英文学. 39, pp.225-247, 1996. The Society of English Literature and Linguistics,
Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



*二重目的語構文に現れる不変化詞の認可

松元浩一

0. はじめに

二重目的語構文についてはこれまで盛んに、様々に議論されてきた(Cf. Green (1974), Oehrle (1976), Stowell (1981), Larson (1988) Pinker (1989), Goldberg (1989, 1995), Matsumoto (1993, 1994))。しかし、不変化詞(particle)を伴う二重目的語構文に関しては、構造との関連で議論されているものはいくつか散見されるが³ (cf. Emonds (1972), Oehrle (1976), Stowell (1981), Dikken (1995), Koizumi (1993, 1995), Ura (1996))、不変化詞の意味を考慮しての説明は少ないように思われる。本稿では以下のような例についての考察を試みる。

- (1)a. John sent Bob off/ * across a package.
b. * John gave Bob off/across a package.
- (2)a. * John tapped Mary a tune on the xylophone.
b. John tapped Mary out a tune on the xylophone.
- (3)a. John sent Bob off a package.
b. %John sent off Bob a package.
c. * John sent Bob a package off.

上掲の不変化詞を伴う二重目的語構文(Double Object Construction with Particle: 以下 DOCP)には次の問題がある。(1)が示すように、特定の二重目的語動詞に特定の不変化詞しか現れないのはなぜなのか、また、(2)が示すように、二重目的語構文を認可しない動詞が特定の不変化詞と共に起ると、二重目的語を選択するのはなぜか、さらに、(3)が示すように、二重目的語構

文に不変化詞が現われる場合、ふたつの名詞句間に生起しやすいのはなぜか。(1)及び(2)は動詞と不変化詞の語彙(あるいはそれらの意味構造)に関する問題、(3)は統語構造に関する問題である。

以下では、まず不変化詞の一般的特性を Oehrle(1976)の例をもとに概観し、次に二重目的語構文がとる不変化詞の特性を考察する。二節では、(3)について、不変化詞及び DOCP に関する先行研究とその問題点に言及し、最後に、語彙意味論の立場から(1)(2)を説明する代案を提示したい。なお、(3)については問題点を考察するに留め、稿をあらためて論じる。

1. 不変化詞の特性

Oehrle(1976)は不変化詞をその意味と機能から verbal particle (以下 V-prt)、predicational particle (以下 PRED-prt)、prepositional particle (P-prt)の三つに分類している。はじめに、V-prt と PRED-prt について考察したい。

1. 1 V-prt と PRED-prt の特性

以下の例について考えてみる。

(4)a. We counted out some money.

b. We counted some money out.

(5)a. We can count John out.

b. * We can count out John.

[ただし、(4b)では money に強勢があり、(5a)では out に強勢がある] (5b)が示すように「除外する」という意味のとき、不変化詞は動詞の右隣には生起することができない。

(6)a. the counting out of the money (took seven hours.)

b. * the counting of the money out (took seven hours.)

(7)a. * the counting of John out (was a mistake.)

b. * the counting out of John (was a mistake.)

(4)を(6)のように動名詞化すると(4a)の場合は容認されるが、(5)の動名詞化は(7)が示すようにいずれも容認されない。すなわち、(6a)の out は counting

とともに of the money という補部をとることができるという点で動詞的(V-prt)である。他方、(5)を動名詞化した(7)の out は以下のような一般的な叙述語と同様の振る舞いを示す。

- (8)a. John painted the house red.
- b. * the painting of the house red.
- c. * the painting red of the house.

つまり、(7)に見られる out は(8)の red と同じく、補部を叙述する機能を担っていると考えられるので、(5)に示された out は叙述的(PRED-prt)であると言える。

- (9)a. John drove the wolves away slowly.
- b. * John drove the wolves slowly away.
- (10)a. John drove the car slowly away.
- b. John drove the car away slowly.

V-prt は動詞的であるが故に動詞との「結びつき」⁽⁴⁾が強く、そのために、(9b)が示すように、両者の間に、目的語以外の要素(slowly)が介在するとその結びつきが阻害され非文になると考えられる。一方、(10)では、away は slowly とともに目的語の様態を表している PRED-prt なので動詞との結びつきには関与せず、slowly が動詞と away との間に介在しても問題はない。ここで、注意すべきことは、動詞と不変化詞の間に目的語が介在しても、それは両者の結びつきに影響を及ぼさない点である。つまり、(9b)と(10b)の文法性の違いは目的語の介在に因るものではなく、slowly の介在に因るものである。次の例を見てみよう。

- (11)a. Max passed out quickly.
- b. * Max passed quickly out.
- (12)a. The parade passed by quickly.
- b. The parade passed quickly by.

(11)と(12)はいずれも自動詞の場合で目的語の介在はないが、(11b)は(9b)と同様に非文になる。つまり、out は主語の行為を表す V-prt であると考えられ、quickly が動詞と out の間に介在するために(11b)は容認されない。ところが、(12)では、by は主語の様態を表す PRED-prt であると解釈され、(10)と同じ

く動詞との結合に関与しないので、quickly が介在しても問題ない。

以上の事実から、他動詞では、不変化詞が「目的語の様態」を叙述している PRED-prt の場合、目的語の後ろに生起し、動詞の右隣には生起することができない、しかし、動詞と共に「主語の行為」を表す V-prt の場合は、動詞の右隣が目的語の右に生起できる。他方、自動詞では、不変化詞が「主語の様態」を叙述している PRED-prt の場合、動詞との結合には関与しないので、(12b) が示すように、動詞の右隣に生起しなくてもよいが、「主語の行為」を表す V-prt の場合は、(11a) のように、必ず動詞の右隣に生起しなくてはならない。

1. 2 V-prt と P-prt の特性

次の例について考えてみる。

(13)a. John drove the wolves away.

b. John drove away the wolves.

(14)a. John pushed the plate away.

b. John pushed away the plate.

(15)a. John pushed the plate away from him.

b. * John pushed (*t*) away the plate from him.



(16)a. John pushed the plate slowly away from him.

b. * John pushed the plate away *slowly* from him.

前掲の(9)において、away は V-prt であることを見た。このことに基づけば、同様のことが(13)(14)にもあてはまると思われる。ところが、(14)に方向を表す前置詞句を付けた場合、(15b)が示すように、同じ V-prt でありながらもこの文は容認されない。Oehrle(1976)はこの事実を Heavy-NP Shift によって説明を試み、(13b)(14b)は、いずれも、(13a)(14a)に其々 Heavy-NP Shift を適用した結果派生されたものだとする。他方、(15a)に Heavy-NP Shift を適用したときに(15b)が容認されないのは、away from him が前置詞句として一つの構成素を形成しているために、away と from の間を割って the plate を移動できないことに因ると説明されている。このことから導き出されるこ

とは、(15)の away は V-prt でもなければ、PRED-prt でもないということである。この away は from と一つの構成素を成す前置詞的な不変化詞(P-prt) であると考えられる。(13)から(15)に関して、Heavy-NP Shift が実際に適用されているかどうかは別にして、(15)における away が P-prt であると考えられる証拠は(16)の他に(17)にも窺われる。

- (17)a. John pushed all dishes containing meat away from him.
 b. * John pushed (t) away all dishes containing meat from him.



他方、以下の不変化詞は P-prt とは対照的である。

- (18)a. John handed off the ball to his fullback.
 b. John handed the ball *off to* his fullback.
 (19)a. John had handed the ball off secretly to his fullback.
 b. ? * John had handed the ball *secretly off to* his fullback.
 (20)a. John drew out a knife from within his coat.
 b. From within his coat, John drew out a knife.
 c. * *Out from within* his coat, John drew out a knife.

(18b)では off と to が隣接しても構わないが、(19b)のように secretly を隣接した off to の前に置くと、容認度が下がるので(offの前に休止が入ると容認度は上がるかもしれない)、off は to とひとつの前置詞句と見做される P-prt ではない。また、(20c)は、(20b)とは異なり、out まで話題化すると容認されなくなるので P-prt ではない。

こうした事実から、不変化詞には V-prt、PRED-prt の他に P-prt もあり、P-prt の意味は方向を表すことがわかる。(cf. その他の不変化詞の特性については Kakuta (1979) に詳しい。)

1. 3 二重目的語構文に現れる不変化詞の特性

与格交替において、与格構文はものの移動を表す移動構文、二重目的語構文はものの所有を表す所有構文であることが知られている。前節で見たように、P-prt は方向を表す前置詞句と一つの構成素を成すと考えられるので、与格構文と共起しても二重目的語構文と共起するとは思われない。たとえ、P-prt

が前置詞句と共に起せず単独で二重目的語構文に現われるとしても、それが方向を表すとすれば、移動が含意されるので二重目的語構文とは相容れない。

- (21)a. John threw the ball *down the field* to Max.
b. * John threw Max the ball *down the field*.
c.? * John kicked me *in* the soccer ball.
d.? * John kicked *in* the soccer ball to me.
e. John kicked the soccer ball *in* to me.

(21b)が非文なのは、downがPATHを意味するため、(21c)が容認されないのはinが方向をあらわすP-prtであることによると思われる。事実、(21d)のように、inはV-prtの生起する位置には現われることができないが、(21e)が示すように、前置詞句の前には現われ得る。このように考えると、二重目的語構文に現われる不変化詞はV-prt(または、PRED-prt)であることが予想される。同様の例が以下にも見られる。

- (22)a. The umpire threw the ball *out* to the pitcher.
b.? * The umpire threw *out* the ball to the pitcher.
c. The umpire threw the ball *swiftly out* to the pitcher.
d. * The umpire threw the ball *out* *swiftly* to the pitcher.
e. * The umpire threw the pitcher *out* the ball.

(22a・b)からoutはP-prtであると考えられる。また、(22d)が容認されないのは、swiftlyが一つの構成素を成すと思われるout to the pitcherの間に割り込んでいることによる。つまり、(21c)(22e)が示すように、所有構文である二重目的語構文はP-prtとは相容れない。

- (23)a. The secretary sent a messenger *over* to me.
b. The secretary sent *over* a messenger to me.
c.??The secretary sent a messenger *quickly over* to me.
d.?The secretary sent a messenger *over* *quickly* to me.
e. The secretary sent me *over* a messenger.

(23a)と(23b)を見る限り不変化詞の機能を特定することはできないが、(23c)を見ると、動詞とoverの間にquicklyが介在すると容認度が下がることから、quicklyが動詞とoverの結びつきを妨げていると考えられる。すなわち、quickly

が over の前にあるからといって、over と to は一つの前置詞句を成すと見做すことはできない。事実、(23d)が示すように、quickly が over の後ろに生起すると、容認度が幾分上がる。つまり、over は P-prt ではない。ということは、(23a・b・c・d)に見られる over は V-prt であると考えられるので、(23e)の DOCP の over も V-prt であると思われる。

2. 先行研究とその問題点

これまで不変化詞は、例えば、冒頭に挙げた(3)のように、文中におけるその位置に関して主に議論されてきた。

- (3)a. John sent Bob off a package.
 b. %John sent off Bob a package.
 c. * John sent Bob a package off.

また、前節でみた不変化詞の動詞的な特性と叙述的な特性を考慮したときに、分析方法として、直感的には、次の可能性が考えられる。ひとつは複合動詞を仮定する分析、もうひとつは小節(small clause)を仮定する分析である。以下では、統語構造に関わるこれらの分析と Goldberg(1995)によって提案された「文法構文」(Grammatical Construction)によるアプローチを簡単に概観し、その問題点を検討する。

2. 1 複合動詞⁽²⁾による分析

Stowell(1981: 301ff)は語形成規則によって次のような構造を仮定している。

- (24)a. [_v V-NP]: Wayne [_{v'} [_v sent-Robert] [a telegram]].
 b. [_v V-Prt]: Kevin [_{v'} [_v turned-on] [the light]].
 (25)a. Kevin turned the light on.
 b. [_v [_v V-NP]-Prt]
 c. Kevin [_{v'} [_v [_v turned-the light]-on]].

(24a・b)は語形成規則によりそれぞれ動詞に名詞と不変化詞が編入されている(incorporated)ことを示しており、(24b)の交替形である(25)は(24a)の名

詞編入規則により派生されたと仮定される。しかし、この規則は Stowell 自身も述べているように、英語にしかない、しかも動詞だけに適用されるという点で「ふつうではなく」(“unusual”)、一般性に欠ける。この他に、複合動詞の構造として(26a・b)が考えられるが、Stowell の提案も含めて次に挙げられた事実を説明できない。

(26)a. V_i [$_{VP}$ NP [$_V$ [$_V$ e] $_i$ Prt]]

b. [$_V$ V-Prt] $_i$ [$_{VP}$ NP [$_V$ e] $_i$]

(27)a. * Jones pulled the deal off, and Peters, the money in.

(Fraser (1974 : 3))

b. * Gary looked Sam's number up, and Mittie, my number up.

(Johnson (1991 : 591))

(28)a. Jones pulled the old table cloth off, and Peters, the new one on.

(Fraser (1974 : 3))

b. Sally put the dessert out and her husband the dinner dishes away.

(Kroch (1979 : 223))

(29)a. Robert [$_{VP}$ was [$_V$ sent t] a telegram].

b. Robert [$_{VP}$ was [$_V$ sent t] off a telegram].

(27)のように動詞と不変化詞がイディオムを形成しているときは動詞だけを省略した表現は容認されないので、複合動詞を仮定したときの正しい予測が得られるが、(28)の、イディオムを形成しない例では、動詞が不変化詞と共に複合動詞を形成しているにもかかわらず、動詞を省略した表現が容認されることになる。また、(29)が示すように、複合動詞を仮定すると、その一部を取り出して移動することは認められないはずであるが、事実はそのではない⁽⁹⁾。

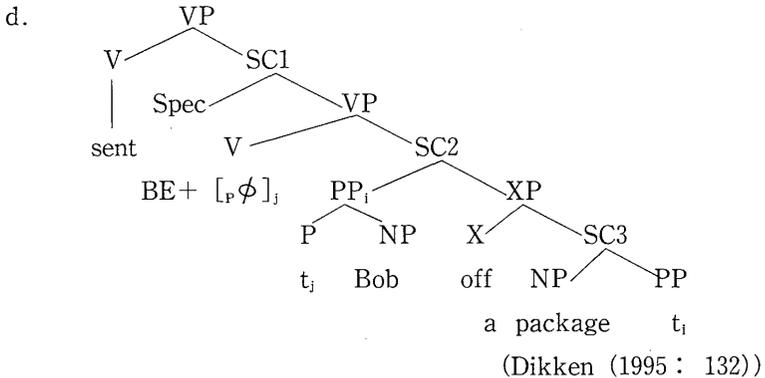
2. 2 小節による分析

小節small clause : 以下 SC)を仮定した構造には以下のような分析がみられる。

(30)a. [$_{VP}$ [$_V$ V [$_{SC}$ NP Prt]]] (cf. Kayne (1985))

b. John [$_{VP}$ [$_V$ cut [$_{SC}$ the log off]]].

- c. John [_{VP} [_{V'} gave [_{SC} his job up]]].
- (31)a. [_{VP} [_{V'} V [_{SC} NP NP]]] (cf. Kayne (1981))
 b. Mary [_{VP} [_{V'} gave [_{SC} John a book]]].
- (32)a. [_{VP} [_{V'} V [_{IP=SC} NP PP(=Prt)]]] (cf. Aarts (1989))
 b. John [_{VP} [_{V'} switched [_{IP=SC} the light off]].
 c. [_{VP} [_{VP} [_{V'} V [_{IP=SC} t_i PP(=Prt)]]] NP_i]
 (cf. Aarts (1989))
 d. John [_{VP} [_{VP} [_{V'} switched [_{IP=SC} t_i off]]] the light_i].
- (33)a. [_{VP} [_{VP} V NP [_{SC} t_i Prt]] NP_i] (cf. Aarts (1989))
 b. Mary [_{VP} [_{VP} sent Jim [_{SC} t_i back] the book_i].
- (34)a. [_{VP} V [_{SC1} [_{Spec}] [_{PP} Prt [_{SC2} NP Pred]]]]]
 (cf. Dikken (1995))
 b. John [_{VP} sent [_{SC1} [_{Spec}] [_{PP} off [_{SC2} a package to Mary]]]]].
 c. John [_{VP} sent [_{SC1} a package_i [_{PP} off [_{SC2} t_i to Mary]]]]].



e. Mary sent Bob off a package.

Kayne は (30) のような動詞・不変化詞構文の構造を仮定する一方で、二重目的語構文にも (31) の SC を仮定する。しかし、(31) では、動詞が SC の節境界をこえて theta role を付与できるのかが問題になる。また、SC 内の一方の名詞が他方の名詞に theta role を付与することはない。

Aarts は(32a)に Heavy-NP shift が掛かって(32c)が派生されると主張するが、常に移動される名詞句が Heavy NP であるという保障はない。更に、次の事実が説明できない。

- (35) a. They set the bomb *off* with a transmitter.
- b. They set *off* the bomb with a transmitter.
- c. * They set *off* with a transmitter the bomb.

(Dikken (1995 : 87))

Heavy-NP shift は移動する名詞句を VP の一番右端、すなわち、VP に付加した全ての副詞句の右に付加する。しかし、Aarts の主張どおり、(35a)から(35b)が派生されると仮定すれば、(35a)の the bomb は副詞句 with a transmitter の右に生起するはずであるが、(35c)が示すように実際は容認されない(もちろん、the bomb が十分に“heavy NP”ならば容認される)。また、(35b)の the bomb は with a transmitter の内側に生起しているので容認されないはずである。なお、Heavy-NP shift ではなく右方移動を仮定しても事実の説明に矛盾が生じる(cf. Dikken (1995 : 87))。同様のことは(33)の DOCP にもあてはまる⁽⁴⁾。

ところで、Dikken は、(34a)のように SC の主要部に不変化詞を仮定し⁽⁵⁾、これをもとにして、DOCP には(34d)のような“small clause recursion”を仮定する。ところが、Safir (1995 : Note10)も示唆するように、(34a)の構造では、次の例が説明できない。

- (36) a. They kicked the dog out.
- b. They kicked the dog out the door.
- c. They kicked the dog out of the door.
- (37) a. They snapped the antenna off.
- b. They snapped the antenna off the car.
- c. They snapped the antenna off of the car.

(Dikken (1995 : 96))

Dikken は(34)において不変化詞を“unaccusative predicate”だと仮定し、名詞 a package は基底構造において Prt の内項であり、Prt を主要部とする SC1 の Spec で対格を付与されるという(cf. Burzio の一般化)。(36a・b・c)にお

いて、「外へ出て行く」のはいずれも the dog であり、同じ主題役割を付与されている。そこで、仮に、(36b・c)において、the door と of the door が out の補部だと仮定してみると、the dog は out の主語(外項)ということになり、次のような構造が考えられる。

- (38)a. They [_{VP} kicked [_{SC1} [_{Spec}the dog_i] [_{PP} out [_{NP} t_i]]]]].
 b. They [_{VP} kicked [_{SC1} [_{Spec}the dog] [_{PP} out [the door]]]]].
 c. They [_{VP} kicked [_{SC1} [_{Spec}the dog] [_{PP} out [of the door]]]]].

すなわち、(38a)では out は非対格述語なので the dog は内項の位置で θ_1 が与えられるが、(38b・c)では the dog は外項の位置で同じ θ_1 を付与される。つまり、先の仮定に従うと、同じ θ_1 を担う the dog が異なる位置に生起して UTAH違反が生じてしまう。Dikken はこの違反を回避する為に、(36b・c)においても the dog は out の内項だと仮定し、the door と of the door は、(34a)に拠り、(39b・c)のように SC2内の叙述語だと考える。

- (39)a. They [_{VP} kicked [_{SC1} [_{Spec}the dog_i] [_{PP} out [_{NP} t_i]]]]].
 b. They [_{VP} kicked [_{SC1} [_{Spec}the dog_i] [_{PP} out [_{SC2} t_i the door]]]]].
 c. They [_{VP} kicked [_{SC1} [_{Spec}the dog_i] [_{PP} out [_{SC2} t_i of the door]]]]].

しかし、特に(39b)では、the door は叙述する対象を持たず、この語そのものが叙述名詞であるとは考えられないので、UTAH違反を回避したとしても問題が残る。

次の例を見てみる。

- (40)a. John threw up his dinner.
 b. John threw up.
 (41)a. Eat up, you guys, and get back to work.
 b. Drink up, and let's get going.

(40a)を除くこれらの例には目的語がない。したがって、本節で概観したすべての SC 分析では、更に何らかの制約か仮定を設けなければ、十分に説明できない。

さらに重要なことは、本稿冒頭で提示した(1)(2)の例や以下に示す例は、上で述べたSC分析と複合動詞による分析では十分に説明されないことである。

(42=1)a. John sent Bob off/ * across a package.

b. * John gave Bob off/across a package.

(43)a. John fished out an apple for Mary.

b. John fished Mary out an apple.

(44)a. John bit off a piece of licorice for himself.

b. John bit himself off a piece of licorice

(45)a. John hacked off a piece of steak for himself.

b. John hacked himself off a piece of steak.

(Oehrle (1976 : 120))

(46)a. The secretary sent out a schedule to the stockholders.

b. The secretary sent out the stockholders a schedule.

(Hudson (1992 : 259))

(47)a. I picked out a dress for her.

b. I picked her out a dress. (Bowerman (1987))

(48)a. Juan tapped/banged out a tune on the xylophone for her.

b. Juan tapped/banged her out a tune on the xylophone.

(49)a. John will clean up my room for me.

b. John will clean me up my room.

(Mazurkewich & White (1984 : 270))

(50)a. John poured out a cup of coffee for me.

b. John poured me out a cup of coffee.

先に触れたとおり、(42=1)は特定の二重目的語動詞に特定の不変化詞しか容認されないことを示しており、(2)及び(43-45)(47-48)は二重目的語構文を認可しない動詞が特定の不変化詞と共に起ると、二重目的語を選択することを表している。すなわち、統語構造の他に語の意味構造がより密接に関与していることに他ならない。このことについては三節で詳しく取り上げる。

2. 3 構文による分析

ここではGoldberg (1992 ; 1995)の構文による分析の問題点を考える。不変

化詞には、先に言及した V-Prt、PRED-Prt、P-Prt のほかに、アスペクトに関する意味を担うものがある。

- (51)a. He cleaned the mess up.
b. ≠ the mess was/is up.
- (52)a. John payed off his debts,
b. ≠ his debts were/are off
- (53)a. The treasurer wrote them out a cheque.
b. ≠ a cheque was/is out.
- (54)a. She packed them up a good lunch.
b. ≠ a good lunch was/is up.
- (55)a. John will clean me up my room.
b. ≠ my room will be/is up.
- (56)a. She showed me over the luxurious apartment.
b. ≠ the luxurious apartment was/is over.

(54・55)は、いずれも、ふつうは二重目的語構文を認可しない動詞が特定の不変化詞と共起すると二重目的語を選択する例である。興味深いのは、上例では、前節でとりあげたような、SCの主要部を成したり、SCの指定部にある名詞を叙述したりする意味機能が不変化詞にはないことである。以下では、これらの事実が Goldberg の提案する分析にとって問題になることを見ていく。

Goldberg は、構文と意味に関する原理及びそれから生じる推論を次のように考えている。

- (57) Synonymy is Avoided: If the two constructions are syntactically distinct, they must be semantically or pragmatically distinct.

Pragmatic aspects of constructions involve the information structure of the clause, including such things as topic and focus.

Corollary I: If two constructions are syntactically distinct and S(emantically)-Synonymous ⇔ they must not be P(ragmatically)-Synonymous.

Corollary II : If two constructions are syntactically distinct and P-Synonymous \square they must not be S-Synonymous. (Goldberg (1992 : 65-66))

つまり、二つの構文があるときに、両者の統語構造が異なればその意味か語用論的な意味が異なる。この他に、構文自体がもつ「装置」として、下のよう二つの意味役割が仮定されている。

(58) Participant role : part of a verb's frame semantics (or a verb's frame-specific roles) (下線は筆者)

Argument role : the roles associated with the construction ;
such as agent, patient, goal, etc. (Goldberg (1992 : 38))

“participant role”は、動詞と結びついた“frame”が指定する、語用論上の意味役割、“argument role”は、文法構文の統語構造に直接連結される agent や patient 等の意味役割である。

これらをもとに二重目的語構文と DOCP について考えてみる。両構文は統語構造が異なるので、(57)に従うと、意味か語用論的な意味が異なっていないといけな。ところが、(53-56)にみるように、不変化詞がアスペクトに関係している場合、動詞とはちがって、(59a)のように argument role を付与することはできない。反対に、(59b)のように構文から不変化詞に argument role が付与されるとも考えられない。

(59) a. [...XP... prt...YP...]

 a-role₁ a-role₂

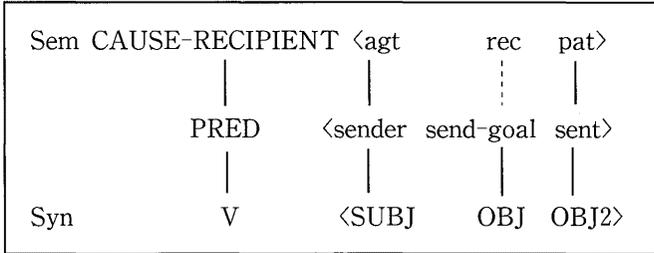
b. [Constr...V...prt...YP...]

 a-role

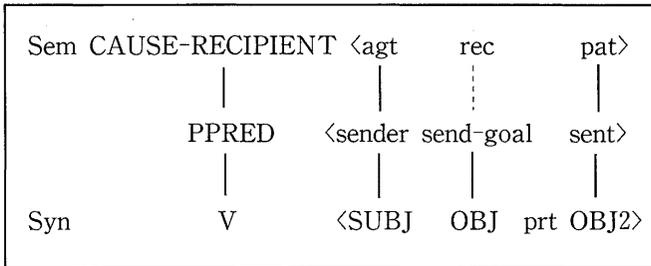
(*Constr* : Construction)

つまり、二重目的語構文と DOCP とでは、次のように、共に同じ argument role を持つ。

(60) a.



b.



しかし、このように考えると、argument role から文法構文の統語構造へのリンキングも同じだということになる。リンキングが同じだと、両構文の意味も同じということになる。したがって、(57)の条件を満たすためには両構文の語用論的な意味が異なると言わねばならない。すなわち、両構文は不変化詞の有無という点でのみ統語構造上の違いがあるので、その違いは不変化詞の語用論的な意味の違いに還元されないとはいけない。しかし、不変化詞はアスペクトを担っているので、アスペクトが両構文の語用論的な意味の違いに関与するとは考えられない。

このように、Goldberg のアプローチでは二重目的語構文と DOCP の違いを十分に説明できないし、また、次のような不変化詞の生じる位置に三つの場合があることは全く説明できない。

(61) a. John sent Bob *off* a package.

b. %John sent *off* Bob a package

(62) a. Can't you send me some *over* right away?

b. Can't you send me *over* some right away?

(Oehrle(1976:195)) (下線は筆者)

- (63)a. He wrote me *out* a check.
 b. %He wrote me a check *out*.

3. 問題解決への可能性

一節では不変化詞の意味機能について、二節では主に DOCP の構造と不変化詞の生じる位置に関する問題点、及び不変化詞のもつ語彙的特性についての問題を論じた。以下では、これらの問題に対する解決への可能性をさぐる。ここで、再び冒頭で述べた問題点について触れておきたい。

- (64)a. John sent Bob off/ * across a package.
 b. * John gave Bob off/across a package. [= (1)]
 (65)a. * John tapped Mary a tune on the xylophone.
 b. John tapped Mary out a tune on the xylophone. [= (2)]

まず、(64)が示すように、特定の二重目的語動詞に特定の不変化詞しか現われないのはなぜなのか、また、(65)が示すように、二重目的語構文を認可しない動詞が特定の不変化詞と共起すると、二重目的語を選択するのはなぜか、ということが論点であった。さらに繰り返せば、(64)及び(65)は動詞と不変化詞の語彙(あるいはそれらの意味構造)に関係する問題である。

DOCP に現われる不変化詞には V-Prt (verbal)、特に、アスペクトを表すものがあることを既にみた。以下では、Safir (1995) をもとに、これらの不変化詞はすべて動詞に語彙として選択されている補部だと考える。

Safir は (66) のように補部の意味的選択に関して、選択されていないような目的語が補部として存在してはならないと述べている。

- (66) Any theory that assumes complementation is semantically selection-driven excludes unselected objects.
 (Safir, (1995: 2))

- (67) John saw Mary move *it*. (Safir, (1995: 5))

例えば、(67)では、“move it”というイディオムにみられる“it”は、指示的(referential)ではないが“move”によって意味的に選択された目的語であるので、単なる“move”とは異なる、“make haste”、“get out of the way”とい

う意味を含意する機能をもつという。次の例の不変化詞も、動詞とイディオムを形成する、しないにかかわらず、意味的に動詞によって選択されている補部である。

(68) Mary made out John a fool. (Safir, (1995 : 30))

(69) John sent the book back to Mary. (Safir, (1995 : 34))

すると、先に見た、(64)のDOCPに現われている不変化詞も動詞によって意味的に選択された補部である、つまり、特定の不変化詞しか現われないと考えられる。また、(65)では、ふつうは二重目的語を取れない動詞だが、不変化詞が動詞に選択されることで補部選択が変わり、二つの目的語を取れるようになると仮定される。すなわち、選択された不変化詞は動詞と共同で二つの名詞補部の選択に関与すると考えられる。

ところが、ここで問題が生じる。不変化詞は普通の名詞補部とは異なり、theta roleをもらうことで動詞により認可される要素ではないし、格を付与されるわけでもないので、項の位置に生起するわけではない。しかし、V-Prtであれ PRED-Prtであれ意味機能を担っており、さらに、(43-50)の不変化詞は二つの名詞補部の選択に、(53-56)の不変化詞はアスペクトにも関与している。したがって、不変化詞は、何らかの方法で認可される必要がある。

そこで、Rapoport (1991)が提案する“event role”(以下 e-role)を導入して説明を試みたい。(70)の例を見てみる。

(70)a. Noa ate the meat raw.

b. Tal sold the tuxedos used.

c. The chef cooked the bird contaminated.

d. The painter opened the door wet.

e. Tamar cut the bread hot. (Rapoport (1991 : 161))

Rapoportは、下線部の二次述語はtheta-roleが付与されない“adjunct predicate”だが、意味的に、常に“Stage-level Predicate”としての機能を担っているので、(70)の構文の基底構造に生成されなければならないと述べる。すなわち、二次述語の“Stage-level Predicate”としての特性は動詞との語彙的な認可関係により規定される。(71)を見てみよう。

う意味を含意する機能をもつという。次の例の不変化詞も、動詞とイディオムを形成する、しないにかかわらず、意味的に動詞によって選択されている補部である。

(68) Mary made out John a fool. (Safir, (1995: 30))

(69) John sent the book back to Mary. (Safir, (1995: 34))

すると、先に見た、(64)の DOCP に現われている不変化詞も動詞によって意味的に選択された補部である、つまり、特定の不変化詞しか現われないと考えられる。また、(65)では、ふつうは二重目的語を取れない動詞だが、不変化詞が動詞に選択されることで補部選択が変わり、二つの目的語を取れるようになると仮定される。すなわち、選択された不変化詞は動詞と共同で二つの名詞補部の選択に関与すると考えられる。

ところが、ここで問題が生じる。不変化詞は普通の名詞補部とは異なり、theta role をもらうことで動詞により認可される要素ではないし、格を付与されるわけでもないので、項の位置に生起するわけではない。しかし、V-Prt であれ PRED-Prt であれ意味機能を担っており、さらに、(43—50)の不変化詞は二つの名詞補部の選択に、(53—56)の不変化詞はアスペクトにも関与している。したがって、不変化詞は、何らかの方法で認可される必要がある。

そこで、Rapoport (1991)が提案する“event role”(以下 e-role)を導入して説明を試みたい。(70)の例を見てみる。

(70)a. Noa ate the meat raw.

b. Tal sold the tuxedos used.

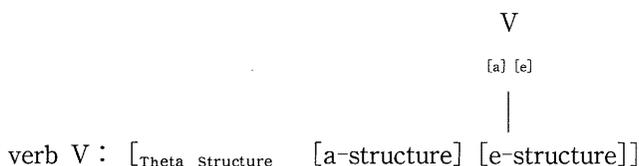
c. The chef cooked the bird contaminated.

d. The painter opened the door wet.

e. Tamar cut the bread hot. (Rapoport (1991: 161))

Rapoport は、下線部の二次述語は theta-role が付与されない“adjunct predicate”だが、意味的に、常に“Stage-level Predicate”としての機能を担っているので、(70)の構文の基底構造に生成されなければならないと述べる。すなわち、二次述語の“Stage-level Predicate”としての特性は動詞との語彙的な認可関係により規定される。(71)を見てみよう。

(71)a.



- b. LICENSING PRINCIPLE: Every phrase in a syntactic structure must be licensed through the direct linking of a position in its thematic structure to a position in the thematic structure of the head of its clause, within the government domain of that head.

(Rapoport (1991: 170))

動詞も二次述語も自らの辞書内に(71a)のような Theta Structure をもち、そのうちの e-structure を介して互いの event place をリンクさせることで認可し合う。その際の認可の条件は(71b)の原理に従う。この認可原理によって認可されると、stage-level の付加述語であっても項と同様、統語構造(D構造)に投射される⁽⁶⁾。

(43—50)にみた DOCP の不変化詞も、(53—56)にみた、アスペクトを担う不変化詞も、二次述語と同じように、stage-level の意味特性をもつ。つまり、不変化詞は、stage-level の二次述語と同様、統語構造において項の生起する A 位置には生じないけれども、自らがもつ e-structure を介して動詞の e-structure とのリンキングによって、補部として認可されると考えられる。果たして、(64)が示すように、特定の二重目的語動詞に特定の不変化詞しか現われない点については、動詞と不変化詞との e-structure を介しての認可関係が関与していると考えられる。また、(65)が示すように、二重目的語構文を認可しない動詞が特定の不変化詞と共起すると二重目的語を選択することについては、不変化詞が動詞と共同でふたつの目的語を選択した結果、不変化詞を伴わないときは異なり、補部選択が変化したことに因ると考えられる。

4. むすびにかえて

残った問題として、次のことが挙げられる。

(72)a. John sent Bob off a package.

b. %John sent off Bob a package.

c. * John sent Bob a package off. [= (3)]

(72)が示すように、二重目的語構文に不変化詞が現われる場合、ふたつの名詞句間に生起しやすいのはなぜか、という統語構造に関する問題がある。また、(72c)とは異なり、(62a)(63b)のように、不変化詞によっては文末での位置が容認される場合があることも問題として残されている。不変化詞を認可する要因についてもさらに検討を要する。例えば、二重目的語をとれない動詞が特定の不変化詞と共起すると DOCP が可能になるときに、不変化詞の意味クラスとの関連があるのか。(70)の二次述語とは異なり、不変化詞は(43)等に見られるように新たに項をとれることも認可に関わる問題として考えられる。

註

* 本稿執筆に際し稲田俊明先生に貴重な助言を賜った。記して謝意を表します。

- (1). ここでいう「結びつき」とは直観的、記述的な観察に基づいてのことである。
- (2). 本稿では、複合動詞 [V-Prt] を V^0 とみなす。
- (3). Stowell (1981)による説明は次のとおり。John [_v [_v sent- [Mary]_i] a telegram [_e]_i] において、[_e]_i は V^0 内において [Mary]_i に統率されており、主題役割を付与される。与格形の場合、to Mary が [_e]_i に生起する。Mary was sent a telegram (by John) という受動形はこの与格形から派生されると仮定されている。
- (4). Aarts (1989: 288) は同じ DOCP でも *She wrote Jim out a note* には SC を仮定していない。というのも、“a note was out” という解釈がないことによると考えられる: She [_{VP} [_{VP} wrote [Jim] [_{NP} e_i] [out]]] a note_i
- (5). Dikken (1995: 110) は次のような仮定をもとにしている。

- a. Particles are independent SC heads.
 - b. Particles are ergative (or unaccusative) prepositions.
 - c. Particles are non-lexical Prepositions.
 - d. $[_{IP} NP [_{VP} V [_{SC1} [_{spec}] [_{FP} Prt [_{SC2} NP Pred]]]]]$.
- (6) Rapoport は動詞であれ名詞であれ、其々の辞書内に(70a)のような“Theta Structure”と呼ばれる語彙表示を仮定する。この表示は“a-structure (argument structure)”と“e-structure (event structure)”から構成される。文に含まれる要素のうち項は、動詞がもつ a-structure と自らがもつ a-structure とをリンクさせて、(70b)の認可原理によって認可されると動詞の a-structure から直接統語構造(D構造)に投射される。他方、項以外の要素は、統語構造へ直接には投射されないが、投射される必要がある場合に(不変化詞や stage-level の付加述語)、動詞の e-structure とその要素のもつ e-structure とが、(70b)の認可原理によってリンクされると項以外の要素でも統語構造への投射が可能になる。

References

- Aarts B. (1989) “Verb-Preposition Constructions and Small Clauses in English,” *Journal of Linguistics* 25, 277-290.
- Bowerman, M. (1987) “Commentary: Mechanisms of Language Acquisition,” in MacWhinney, B. (ed.) *Mechanisms of Language Acquisition*, 443-466. Erlbaum: New Jersey.
- Dikken, M. den (1995) *Particles*. Oxford University Press: New York.
- Emonds, J. (1972) “Evidence that Indirect Object Movement is a Structure-Preserving Rule,” *Foundations of Language* 8, 546-561.
- Fraser, B. (1974) *The Verb-Particle Combination in English*. Taishukan: Tokyo.
- Goldberg, A. (1989) “A Unified Account of the Semantics of the English Ditransitive,” *BLS* 15, 79-90.
- . (1992) *Argument Structure Constructions*. Doctoral dissertation, University of California at Berkeley.

- . (1995) *Constructions*. The University of Chicago Press : Chicago.
- Green, G. (1974) *Semantics and Syntactic Regularity*. Indiana University Press : Bloomington.
- Johnson, K. (1991) "Object Positions," *Natural Language and Linguistic Theory* 9, 577-636.
- Kakuta, K. (1979) "Transitive vs. Intransitive Prepositions" in *Osaka Literary Review* 18, 31-43. Graduate School, Osaka University.
- Kayne, R. (1981) "Two Notes on the NIC," in Belletti, A., L. Brandi, and L. Rizzi (eds.), *Theory of Markedness in Generative Grammar*. Scuola Normale Superiore : Pisa.
- . (1985) "Principles of Particle Constructions," in Guéron, J. et al. (eds.), *Grammatical Representation*. Foris : Dordrecht.
- Koizumi, M. (1993) "Object Agreement Phrases and the Split VP Hypothesis," *MIT Working Papers in Linguistics* 18, 99-148.
- . (1995) *Phrase Structure in Minimalist Syntax*. Doctoral dissertation, MIT.
- Kroch, A.S. (1979) "Review of B. Fraser, The Verb-Particle Combination in English," *Language* 55, 219-224.
- Larson, R. (1988) "On the Double Object Construction," *Linguistic Inquiry* 19-3, 335-391.
- Matsumoto, K. (1993) "Two Ways of Production of English Double Object Construction," *Kyudai Eibungaku* 36, 99-125.
- . (1994) "Argument Structure Inheritance of Double Object Construction," *Kyudai Eibungaku* 37, 181-201.
- Mazurkewich, I. and L. White (1984) "The Acquisition of the Dative Alternation : Unlearning Overgeneralization," *Cognition* 16, 261-283.
- Oehrle, R. (1976) *The Grammatical Status of the English Dative Alternation*. Doctoral dissertation, MIT.

- Pinker, S. (1989) *Learnability and Cognition*. The MIT Press : Cambridge, Mass..
- Rapoport, T.R. (1991) "Adjunct-Predicate Licensing and D-Structure," in Rothstein, Susan D. (ed.), *Syntax and Semantics* 25, 159-187. Academic Press : San Diego.
- Safir, K. (1995) "Raising, Control and Selection in Complementa- tion," ms. Rutgers University.
- Stowell, T. (1981) *Origins of Phrase Structure*. Doctoral dissertation. MIT.
- Ura, H. (1996) 'On the Structure of "Double Objects" and Certain Differences Between British and American English,' *Eibungaku Kenkyu (Studies in English Literature)* 72-2, 269-285.